

「中仮義解釈（三論）、三諦説（天台）、および三時教判（法相）に通底する中道至上観をめぐって」

斎藤 明

周知のように、非有非無、あるいは不苦不楽を内容とする中道説は、仏教という宗教思想が展開する中できわめて重んじられたものの見方（正見）であり、それをも含む実践（八正道）の基本的なあり様を示している。この点で中道説はインド、東南アジア、中国、チベット等に伝承された仏教思想を貫く、ある種の思想的な軸となって受け入れられてきた。

本発表では、無と空の訳語をめぐる格義仏教に係る論争は措き、羅什以降、隋代の吉蔵に至るまで論じられてきた仮有仮無（空）の中を重んじる中仮思想、空諦・仮諦・中道第一義諦の三諦説を掘り下げた天台教学、ならびに『解深密経』の三法輪説を、それぞれ有教・空教・中道教と意味づけた玄奘の弟子基の思想にみる中道観を仏教思想の中国的展開という視点から再考したい。